

Kinani

きらり

vol.
22

2025.04

新生児の異常のうち、染色体の異常によるものは25%程度とされており、このうち最も頻度の高いのがダウン症です。染色体異常の確実な診断のためには現在でも注射器で羊水を取り出してこの中に含まれる胎児の細胞を使って染色体を調べる必要

診断方法の進化

赤ちゃんが生まれるまでに、その赤ちゃんの状態を診断することを出生前診断と言います。たとえば、妊娠中に超音波で赤ちゃんの性別を診断することなども含まれますが、多くの場合は、胎児の病気や異常を見つけることとして使われています。

産科・婦人科医の

知っておいて
ほしいおはなし



出生前診断のおはなし

がありますが、2011年に原理が発明されたのが、新型出生前診断と言われたNIPTです。

NIPTとは非侵襲的出生前検査の頭文字をとった名前です。母体血に含まれている胎児のDNAを調べることで、胎児の診断を行う方法です。この方法では、お母さんの血液をとるだけで、胎児の染色体についての情報が得られるようになりました。

手軽さとリスク

日本産婦人科学会をはじめとする関連学会で協議をしていますが、検査を行う認定施設を決めています。検査自体は、母体の血液を検査会社に送れば結果が出るので、認定施設でなくても簡単にいきます。このため、妊娠や出産と関係のないクリニックが、より安い費用で手軽に検査を受けられることを宣伝して、多くの検査を行うということが起こりました。

安く手軽に検査を受けられるのは良いことのように思われますが、異常なしという結果を受け取られる多くの方にとっては、あまり問題は起こらないと思います。しかし、異常の可能性がある、あるいは検査の結果が判定不能であるという結果となった場合、検査だけを行っている

クリニックでは、結果を渡すだけで、そのあとどうすればいいのかの相談には乗ってもらえなくて途方にくれてしまうということがたくさん起こっています。

認定施設で 検査する理由

出生前診断は、生まれてくる赤ちゃんの人生を左右する可能性のある検査ですので、検査自体は簡単であっても、検査を受ける前からお母さんやお父さんにその意味をよく理解していただいて、よく考えたいうえで検査を受けていただくことがとても大切です。結果についても、異常の可能性が出た場合に、ちゃんと相談できる仕組みがあることが大切です。異常なしという結果が出た場合でも、その意味をちゃんとわかっていただくことが大切です。

学会がNIPT実施の認定施設を決めているのは、このような検査前からのカウンセリングをちゃんと行う施設で検査することがとても大切と考えているからです。当センターは、カウンセリングをはじめとしてNIPT検査を主導する臨床遺伝専門医が4名在籍しています。検査は妊娠の初期に行う必要がありますが、関心のある方は診察の際に質問していただければよいと思います。

百日咳のおはなし

ひやくにちぜき

百日咳（ひやくにちぜき）は、百日咳菌（Bordetella pertussis: ボルデテラ・パー トゥシス）という細菌による呼吸器感染症です。「ボル デテラ」は初めてこの菌の分離培養に成功したジュール・ ボルデ先生の名前に由来し、「パートゥシス」は現代ラテン語で「激しい咳」を意味 します。ボルデ先生は後に免 疫反応に関する研究（補体の 発見）でノーベル賞を受賞さ れています。

百日咳の由来



百日咳の症状と経過

その昔、百日咳は症状が始まっ てから完全に回復するまでに、 約3か月（約1000日！）かかって いました。症状の経過には3つ の時期があり、「カタル期」（約2 週間）→「痙咳（けいがい）期」（約2、 3週間）→「回復期」（約2、3週間） と経過します。初期のカタル期 はかぜのような咳、続く痙咳期 は激しい咳で、顔を真っ赤にし てコンコンと激しく発作のよう に咳込み（スタッカート）、最後に ヒューと音を立てて息を吸い込 む（ウーブ）症状が見られます。 あまりにせき込むため目が腫 れること（百日咳様顔貌）もありま す。新生児や乳児早期では特徴 的な咳が無く、息を止めてしま う無呼吸発作やけいれんを起こ して命を落とす赤ちゃんもいま した。咳発作で体力消耗が激し く、脱水や栄養不良が著しい場 合は入院加療が必要となります。 回復期は徐々に徐々に咳が少な くなっていきます。

ワクチンで対策

こんな大変な百日咳を予防す るためにワクチンが開発されま した。現在では5種混合ワクチ ンの中に含まれています。ワク チンの普及により百日咳にかか る人は減りましたが無くなった わけではありません。

昨年（2024年）大阪府内で 289人の百日咳診断例が報 告されています。当センターで も6か月未満の乳児の入院例が ありました。乳児期にワクチン を接種していても、百日咳菌に 対する抗体は小学校に入るころ に下がってくるため、就学前（5歳以上7歳未満）にワクチンの 追加接種（任意接種）が勧められ ています。

スケジュールどおりにワクチ ン接種をすることで、赤ちゃん を百日咳から守ることが大切です。



咳や、発熱、嘔吐、 頭部打撲など、おうちでの急な症状の対 応はここから→



大阪急性期・総合医療センター クラウドファンディング挑戦中!!

がん治療で、 妊娠をあきらめないでほしい。

患者さんの“未来”のために、今の私たちができること。

不妊のリスクをとまなう“がん治療”から、 妊娠の可能性を見つけるための研究にご寄付をお願いします

大阪急性期・総合医療センター レディーフォー



詳しくは↓

